

七日七夜（山本周五郎）

一

本田昌平は、ものごとをがまんすることにかけでは、自信があった。

生れついた性分もあるかもしれないが、二十六年の大半を、そのためにも修業して来た、といつても不当ではない。三千石ばかりの旗本の四男坊というだけで、わかる人にはわかると思う。そのころ世間一般に、

——二男三男は冷飯くらい、四男五男は拾い手もない古草鞋。^{ふるわらじ}

などという失礼な通言があった。土農工商ひつくるめた相場で、なかでも侍はつぶしが利かないのと、体面という不用なものがあるだけ、実情はいちばん深刻だったと思う。

その朝も昌平はがまんした。

「飯のことで怒るなんてあさましい、男が怒るならすべからく第一義の問題で怒らなくちゃいけない、たかが腹の減ったくらい」

そんな独り言を云って下腹へ力をいれてみたり、深呼吸をして、机に向つてみたりした。机の上にはやりかけの写本がある、擬古体のごく嬌めかしい戯作で、室町時代の豪奢な貴族生活、特に銀閣寺將軍の情事に耽溺するありさまが主題になっていた。彼は数年来この種の書物を筆写し、不足な小遣

を補なってきた。内職などは嚴重に禁じられているし、ものがものだけに極秘でやらなければならぬが、手間賃の割がいいのと、自分も艶冶な気分が味わえる点とで、ちょっと一挙兩得的な仕事だったのである。

「二日や三日食わなくなつたつて、人間なにも死ぬわけじゃない」

昌平は筆写にかかった。

「知らせて来るまでひと稼ぎやるさ」

だがいけなかった。手が震えて字がうまく書けない。火桶には螢ほどの残り火があるばかりだし、腹は頻りにぐうぐう鳴りだす。おまけに写している文章は、銀閣寺將軍が酒池肉林の大饗宴をやっているところで、忍耐を持続するには極めて条件が悪かった。

「ちえつ、いったいあいつら、なにをしてるんだ」

彼は筆を措いた。この頃は朝食を知らせに来るのがおそい、だんだんおそくなる傾向であるが、その朝はことにおそかった。

「べらぼうめ、なにが第一義だ」

障子へ日のさしてきたのを見て、昌平はついにがまんを切らした。

「腹が減れば空腹になるのは人間の自然じゃあねえか、おれだって人間だ」

ばかにするなと思ひながら、少しは憤然として外へ出た。彼は侍長屋に住んでいる。横庭の霜を踏んで、台所へはいってゆくと、温かい飯と味噌汁の匂いが、むっと鼻におそいかかり、腹がぐうぐうると派手に鳴って、口の中へ生唾

が溢れてきた。連子窓からさし込む朝日の光の下で、下女たちが食事をしている。昌平はぐつと唾をのみながら云った。

「私の飯はどうしたんだ、まだなのか」

下女たちは一斉に箸を止め、黙って顔を見合せた。

—— 忘れたんだな。

昌平はそう云おうとした。そのとき下女の一人が、「奥さまに伺がって来ます」と云いさまばたばたと廊下へ駆けだしていった。

「支度が出来たら知らせてくれ」

となりたいのを抑えて、昌平は自分の住居へ戻った。

「奥さまに聞いて来る、か、……するとおれは、奥さまのお許しがなければ、飯を食うこともできないわけか」

昌平は泣きたいような心持になった。

旗本で三千石といえば、それほどむやみに貧しくはない、長兄の安左衛門は勘定奉行の勝手係を勤めているので、役料のほかには別途収入もかなりある。にも拘わらず吝嗇漢というか、次弟を町奉行所の書記に出し、三弟は家扶の代役に使い、四番めの昌平などは、

—— 本田の家には類のない能なし。

と云って、殆んど下男同様に扱われた。尤とも下男は給銀を取るが、昌平はときたま蚤の眼脂ほどの小遣を貰うだけだから、実質的には下男に及ばなかったかもしれない。

—— 外へ出るな、みっともない。

—— 客が来るんだ、すっこんでいろ。

—— のそのそ歩きまわるな、眼障りだ。

兄たちは昌平を見るたびにこうとなる。着る物は順送りの

おさがりで、満足な品は一つもないから、みっともないのは当然である。

—— 誰がみっともなくさせて置くんた。

たまにはそのくらいのことを云ってやりたくなるが、云った結果を想像すると、やっぱり黙って聞いているより仕方がなかった。それだけではない、あによめがまたひどく無情なのである。三百両とか持参金附きで来たというが、軀も固肥りでずんぐりしているし、顔も円くて平べったいの、どういうかげんか全体が狐のようにとげとげしてみえる。

—— 実家の安倍では男の躰けがそれはやかましゅうございましてね。昌平の顔さえ見ればこう云った。

彼女の生家は四千石ばかりの旗本であるが、たいそう質実剛健で、食事は麦の他に稗も入れる。男の子は早くから拭き掃除、洗濯などをやらせるし、十歳になるとお針を教えられ、自分の物の縫いつくろいなどは、みな自分でやるのだそうである。

—— いざ合戦というときのためでございますって、戦場には女を伴ってはまいれませんですからね。

そして皮肉なそら笑いをする。つまり、縫い繕いや洗濯などは自分でしろ、というわけなのである。……兄たち然り、あによめ然りだから、召使たちもしぜん彼には冷淡で、こちらの僻みもあるかもしれないが、「へっ古草鞋が」といったふうな眼で見たり、輕蔑したような態度を示した。

「あのう、御膳のお支度が出来ました」

ようやく下女の一人が知らせに来了。

「あ、有難う、すぐゆく」

昌平はつい知らず機嫌のいい返辞をして、いそいそと立つてから、そんな自分のだらしなさに肚が立って「ちえっ」と舌打ちをした。

二

台所の隣りの薄暗い長四畳。そこが彼の食堂であつた。二方が壁、一方が納戸で、廊下のほうだけは障子であるが、廊下の向うが戸袋と壁なので、真昼でも部屋の中は黄昏のよう
に暗いし、年中かび臭く、じめじめと陰気だつた。

昌平は膳の前に坐つた。

もちろん給仕はして呉れない、独りで汁をつけ飯を盛つたが、そこでふと妙な顔をした。

「——なんだこれは」

彼はそつと汁と飯に口をつけてみた。どちらもすつかり冷えていた。昌平は逆上した。さつき下女たちは湯気の立つ飯を食べていたではないか、むつと胃を喰るような、熱い味噌汁の匂いをさせていたではないか。

「それなのにこれはなんだ、ゆうべの残りの冷飯じゃないか、おれはこんなものを」

彼は逆上のあまり膳をはね返した。

二十六年の大半を費やして練りあげた自制力が、そのとたんに切れた。まるで糸かなんぞが切れるように、ぷつんとみごとに切れたのである。昌平はその部屋をとびだし、住居へ戻つて、大至急で着替えをし、刀を差し、再たび外へ出ると、中庭を横切つて、母屋の縁側からあによめの居間へ踏み込ん

だ。

あによめは古足袋を繕ろつていた。
「持参金を此処へ出せ」

昌平はこう云つて、刀を抜いた。あによめはあつけにとられ、平べったい狐のような顔をぽかんとさせ、だらしなく口をあけてこちらを見た。昌平はその鼻先へ刀をつき出しながら云つた。

「人をなんだと思うんだ、金を出せ」

義弟が本気だということ、眼が血ばしつて、刀の尖がこまかく震えていることに気づくと、あによめは突如まっ蒼になつて、「イ」というような声をあげた。

「声をたてるな、じたばたすると斬つてしまふぞ」

「しょ、しょ、しょ」

「金を出すんだ、有るつたけ、静かにしろ、早く、ものを云うな」

ぐいと刀をつきつけた。あによめは操り仕掛の木偶のように、ひよいと跳び上がった。昂奮はしているが、覚悟も相当以上きまっていた。ふだん「能なし」とみくびっていただけに、それがあによめには反比例して強く感じられたらしい。がたがた震えながら、仏壇の蔭のほうへ手を入れかけ、ふとやめて、用筆笥の小抽出をあげた。今にも倒れそうに、足ががくがくしているが、取出したのは古ぼけた財布である。

「馬鹿にするな、そんな小銭じゃあない」

昌平は刀であによめの帯を突いた。

「その仏壇の蔭にあるのを出せ、この際ごまかそうなどとはふといやつだ、斬るぞ」

「で、でも、こ、こ」

刀で帯を突かれ、あによめはこんどは「ヒ」と声をあげながら、そこからかなり大きな袱紗包ふさづつみを取出した。

「自分であけろ、まごまごするな」

袱紗をあけさせると、中に小判の包が八つばかりあった。

昌平はそれを六つ取って左右の袂たもとへ入れ、ちょっと考えて一つ返した。

「兄貴が帰ったらそう云え、これまでの貸を貰ってゆく、唯取ったんじゃないと、わかったか、……この、この、強慾非道な、女め」

廊下へ出たが、なにかすばらしく辛辣しんらつなあぐたいについてやりたいと思い、振返って、ふんと鼻で笑って云った。

「おれの残りの冷飯でも食え」

それ以上のあぐたいは考えつかなかったのである。

彼は通用口から外へ出ると、二丁ばかり走って辻駕つじがに乗った。麹町表四番町から九段坂を下り、そこでべつの辻駕つじがに乗り替えて「浅草橋まで」と命じた。駕などに乗ったのは初めてである、いい心持であった。後悔は少しもない、不徳行為をしたとも思わなかった。あによめの怯えおびあがったぶざまな姿や「イ」というような悲鳴をあげたことや、だらしなく口をあけた、平べったい狐みたような顔を思いだすと、寧ろむしろ自分のやりかたがなまぬるく、穩便えんべんすぎたとさえ思えるくらいだった。

「もっとこたえるような事を云ってやればよかった」

昌平はどこかしらむず痒がゆいような顔をした。

「この狐おんな、おっぺしゃんこ、卑劣漢、ふ、幾らでもあ

ったのに、それからもっと気を喪うしなうほど脅かしてやればよかった」

彼はあによめの頬ぺたを刀のひらで叩いてみる空想をした。これまでの辛抱を思い知らせるとしたら、髪の毛ぐらい切ってやってもよかったかもしれない。

「兄貴のやつ帰って吃驚びっくりするだろうな、どんな顔をするか、腰でもぬかしやしないかどうか、……なにしろいちばん無能の意気地なしがこんな事をやったんだからな、ふ、顔を見てやりたいくらいものだ」

三

昌平はその夜、新吉原の遊女屋へあがった。

自分ではそれほどの謀反気はなかったが、両国橋の近くで、飲んでいるうちに、えいっということになったらしい。駕でゆくか舟にするか、誰かとそんな問答もしたようである。どっちで来たかは覚えがない、気がついたら広い座敷で、大勢の女や男の芸者たちに取巻かれていた。百舄もも蟬燭せみそくがずらっと並んで、そこらじゅう酒徳利やむやみに御馳走を盛った皿や鉢だらけであった。

彼は一瞬どきりとした。

——これはたいへんな事になったぞ。

だがすぐに肚を据えた。

こんな事ぐらい誰だってやるじゃないか、おれだって人間だ、三千石の旗本に生れて、このくらいの遊びをしてなにが悪い。二十六という年まで芸妓遊びはおろか、満身に酒を飲

んだこともないじゃないか。おれだって人間だ、男だ。ろくな小遣も呉れないで、冷飯なんぞ食わせやがって、なにがなんだ。

「さあ、賑やかにわつと騒いで呉れ」

昌平は勇気りんりと叫んだ。

「金はあるぞ、おれはけちなことは嫌いだ」

それからまたなにがなんだかわからなくなった。

女や男が唄ったり踊ったりした。彼の側にいる女は「りんせん」とか「なまし」とかいふ、妙な助動詞のついた言葉で、彼に凭れかかったり手を握ったり、それとなく膝を抓ったりしながら、頻りになにか話しかけた。要約すると、貴方のようないらしい男に逢えて非常に嬉しい、自分はもうやうな好きらしい男に逢えて非常に嬉しい、自分はどうやうになる心配がある、今夜のような気持になったことは初めて、ことによるとこむらがえりを起すかもしれない。だいたいそんなような意味であった。

最後のところで昌平は吃驚した。

「こむらがえりが起るって、その、そんなに気分でも悪いのか」

「まあ大きな声で、気障さますよう」

女はこう云ってまた膝を抓った。そして、自分は本当に好きな人とそうすると、しまいにこむらがえりを起す癖があるのだと説明した。よくはわからないが、それはたいそう濃情だということでもあるらしかった。

昌平は感動させられた。女性の身としてそこまでうちあけて語るといふことは、なみたいでない情緒ではない。けいせ

いのまこと、などというくらいのものではないと思った。

騒ぎは盛大なものだった。誰も彼もが愉快そうに飲んだり食ったりし、代る代る唄ったり踊ったり、そしてまた飲んだり食ったりした。かれらは昌平をいろいろとおだてるような名で呼び、気持が浮いてくるようなうまい世辞を並べ、交代で彼の前へ来てはあいそ笑いをしたり、ぺこぺこむやみにおじぎをした。

「わかった、私は嬉しい、みんなの気持はよくわかった、本当に嬉しい」彼は涙ぐみながら心から云った、「——私は今夜は生れて初めて、人の好意の有難さというものを知った、こんな嬉しいことは初めてだ、さあ飲んで呉れ、みんな好きなだけ飲んで喰べて呉れ」

だがそんな事を云うだけではいけないのだそうであった。言葉などはかれらは喜ばないはなを遣らなくてはいけないのだと、側にいる彼女（つまり彼のあいかたで名は花山という）が教えて呉れた。なおそれには小菊の紙を遣って、あとで引換えるというのが便法でもあり「通」でもあるそうで、わちきに任せておきなましと云うから、すべて彼女に一任した。

「済まない、いろいろ世話をかけて、まことに済まない」昌平はしんみりした気持になって頭を下げた、「——私は実に嬉しい、なんだか他人とは思えなくなった、あとですっかり身の上を話したいが、聞いて呉れるか」

彼女はあでやかに笑って、「一夜添っても妻は妻」であるからには、もちろん二人は他人ではないこと。身の上も聞こうし、「今夜は眠らずに愛し合う」だろうこと。これからも末な

がく契るであろうことなど、溶けるように嬌めかしく囁やくのであった。

すべてが楽しく豪華で、豊かに満ち溢れていた。しかもそのあとには、生れて初めて異性と飲こびを俱にするという、夢のようなすばらしい時間がある。彼は酔った、どうして酔わずにいることができるだろう。彼は酔って、ぶっ倒れて、そうして大声でどなった。

「銀閣寺將軍がなんだ、もう内職なんぞはしないぞ、冷飯も食わない、人を馬鹿にするな、ざまあみやがれ」

それからの経過は判然としない。

眼をさますと独りで寝ていた。そこで枕元の水を飲んで、眠り、また眼をさまして、水を飲んだ。三度か四度そんなことを繰り返して、やがて、こんどは本当に眼がさめてしまった。見るとまわりに屏風をまわして、むやみにぜいたくな夜具の中に寝ている。女の下着らしい物を掛けた絹行燈が、ぼんやりと部屋の中を照し、仄かに香の匂いがしていた。

「これは、どういふことなんだ」

昌平は起きあがった。

あれだけの騒ぎは嘘であったかのように、あたりはひっそりと寝しずまっている。どこかで廊下を歩く草履の音がし、もっと遠くで犬の吠えるのが聞える。近くの部屋で客と女の話し声もするが、それは寝しずまった静かさをいっそう際立てるように思えた。

喉が焼けるようだったが、水はもう無かった。それにひどい空腹である、考えてみると、朝から一度も食事をしていない、酒の肴くらいは摘んだが、腹に溜るような物は喰べてい

なかった。

「ともかく、こうしていても……」

彼は立って廊下へ出た。まだ酔ってはいるがひどい寒さである。手洗い場を捜すのにかなりうろろし、すっかり冷えこんだのだろう、戻りには頻りにくしゃみが出た。ところで弱ったことにこんどは部屋がわからない、廊下を曲るところは慥かなのだが、並んでいる部屋のみつきはみな一律で、これが自分のだという見当がなくなつた。寒さは寒し、腹は減るし、喉は渴くし、そんな寝衣ひとつで、震えながら廊下に立っている自分に気づくと、昌平は情けないほど悲しくやるせない氣持になつた。

ほどなく向うから五十ばかりの婆さんが来たので、呼び止めて事情を話した。

「まあいやだ、おいらんはどなた」

婆さんは冷淡にじろじろ見た。どうも座敷で見覚えのある顔だが、紙ばなを遣つたような記憶もあるのだが、相手はぜんぜん知らないふうで、応対もいやにつっけんどんだった。

「さあ、なんといったか、その、か、……かせん……かせんとかいう」

「うちにはそんなおいらんはいませんよ、お部屋はどの辺だったんです」

「この辺だと思ふんだが、廊下をこう来て、たぶんその」

「へんな客があつたもんだ」
婆さんは口の中で、もちろん聞えるように呟やいた。おいらんの名も知らないなんて、などと云い、「もしや花山さんではないか」と聞き糺して、それならその部屋だと、怒つてで

もいるように指さし、怒ってでもいるように去っていった。

四

それから朝までの事は書きたくない。

昌平は独りで、空腹と渴きと、酔のさめてくる寒さとに震えていた。くしゃみばかりは景気よく出るが、水を貰おうにも喰べ物を取ろうにも、てんで相手になつて呉れる者がなかったのである。

それはまあいい。そういう忍耐は割とすれば馴れている。

また花山さんのおいらんが「今夜は眠らずに愛し合う」とか、身の上話しをよろこんで聞くとか、「こむらがえりが起るかしない」などとまで囁やきながら、こんなにも徹底的に、ぜんぜんすっぱかしをくわせたことも、そこは遊女であつてみれば、一方的に怒る気はなかった。

「これがふられたというやつだろうが、われながら相当なふられたと思うが」

まあこれも遊びとしては粹いさなものだと、諦あきめをつけることはできた。

だがそのあとがいけなかった。

夜明け前についとろとろしたと思うと、やかましい声で起こされ、もう定刻であるから、居続けにするか勘定を払って帰るか、どっちかにきめて呉れと云われた。見ると廊下で部屋を教えた婆さんで、そのうしろに強そうな男が控えていた。

「もちろん帰るが、女はどうした」

昌平も少しはむっとして云った。

「おいらんは癪しやが起つて寝てますよ」

婆さんはせせら笑うように答え、ではこれがお勘定ですと云つて、べらぼうに長い書付をそこへ出した。ごたごたとなにか書き並べてあるが、とうてい読めた代物ではない。見たばかりで眼がちらくらしてくる、で、要するに合計であるが「百七両三分一朱」となっているのをみて、昌平はわれ知らず唸うなり、それから一種の公憤に駆られて云った。

「冗談じゃない、いくら見ず知らずの人間だからって、あんまり人を馬鹿にしては困る」

「おや妙なことを仰おつしゃいますね、このお勘定になにかうろんでもあるつていうんですか」

もしも昌平にして、この世界の事情を多少でも知つていたら、そんなむだな口はきかなかつたであらうし、少なくともその辺で甲かぶとをぬいだに違いない。しかし彼はひらきなおつた、そしてとんでもない意見を述べだした。

「うろんがあるかないか知らない、だが、侍のなかには一年に三兩扶持で暮す者もずいぶんいる、一年に三兩とちょっと、それで侍として家族を養なっているんだ、私は、それは遊んだには相違ない、かなり派手にやったとも思うけれども、いかにどうしたからといって一夜に百何兩などとは」

「それみねえお倉さん」

控えていた強そうな男が婆さんに云った。

「おらあゆうべっからどうも臭えと睨にらんでたんだ。いまどきまともな人間で、あんな金の遣い方ができるわけあねえんだから」

「なにを云うか、聞きずてならんぞ」

思わず昌平はそう叫んだ。

これまでさんざん馬鹿にされたうえ、こんな男に面と向つて、そこまで云われては忍耐はできなかった。が、相手はもちろん承知の上である、寧ろそれを予期していたのかもしれない。

「大きな声を出しなさんな、おらあつぽ聲じゃあねえ耳は聞えるんだ」

男はへへんと笑い、いやな眼でじろつと見た。

「勘定に文句があるんなら、その書附をよく見てここがこうと云ったらいいだろう、一夜に百七両幾らという大尽遊び」男はこちらの身装みなりを眺めた、「——此処こゝじゃあちつとも珍らしかあねえが、その御風態にやあ似合わねえ、うろんに思うのはこつちのほうなんだ、文句があるならちようどいい、この土地にやあ番所てえものがある。そこへいつて黒白をつけやしよう、そうすれば勘定もはつきりする、おまえさんの御身分もはつきりする。両方さっぱりあつくされなした、ひとつ御一緒にまいろうじゃあござんせんか」

刀があつたらどうなったかわからない。しかし、刀は初めに預けてある、それが廓くわの規定だそうだ、昌平はつまるところ眼をつぶるよりしかたがなかった。

「おれが悪かった。勘定をしよう」

彼は腸が捻転ねんてんするような思いで云った。男はまたへへんと笑った。

「どうせ払うんなら文句なんぞ云わねえがいい、金を出して恥をかく馬鹿もねえものさ」そして彼は立ちながら云った、「朝っぱらから縁起でもねえ、お倉さん、あとで塩華を撒いとい

て呉んな」

ひと言ひと言が辛辣な悪意と毒をもっていた。おもんみるに、かれらは日常おのれ自身を卑しくしているため、機会さえあればその返報をするらしい。また感性が単純で直截ちてつだから、その表現も単直であり、且つ効果的に磨きが掛っている。昌平は物心両面にわたつてうちめされ、ふみにじられ、なにもかもぼろぼろになったような氣持で、その家を出た。そして大門をぬけるなり、救いを求めるように、いきなり道傍の飲屋へとびこんだ。

五

昌平はそれから三日三夜、酒びたりになって遍歴した。

どこをどうまわったか記憶はない、根津という処は覚えているが、ともかく岡場所というのだろう。不浄な匂いのする、うす汚ない、小さな狭く苦しい家で、どこにも新吉原よりもっと劣等な、口の悪い女や婆さんばかりいた。彼女たちは「なまし」とも「ありんせん」とも云わなかった。

「けちけちすんなてばせえ」

「さっさとしろってばな、いけ好かねえひょうたくれだよ」

「そんなとけえのたばるでねえッつ」

などと云うふうであつた。そして、おそろく親愛の情を示すのだろうが、むやみに背中だの肩だのを殴りつけ、またふいに突き倒したり、馬乗りになって噛みつく者もあつた。

「これが世の中だ、ざまあみやがれ」

昌平は絶えずそんな独り言を云った。

「これがみんなお互いに人間同志なんだ、お互いに仇でもかたきでもないんだ、どうだ昌平、文句があるか、へ、ざまあみやがれ」

二十五両の包が五つ。新吉原でまず百十両ちかく取られてから、こう乱脈なことを続けたのでは、底をつくのは眼に見えたはなしである。

四日めの朝、まだうす暗いような時刻に、彼はその妙な娼家の一軒から追い出された。雪にでもなりそうな、曇った寒い朝である。酔ってはいるが相当に空腹で、しかしもう飯を喰べにはいる勇氣はなかった。

「——ひでえもんだ、ひでえやつらだ」

昌平は徹底的に剥かれた。懷中にはなさけないほどの小銭しか無いことがわかつている、新吉原ほど辛辣ではなかったが、かれらも昌平を容赦なく搾った。ぶっつけに、あけすけに、悪罵と暴力で搾りあげた。

「——はは、このひょうたくれか、まったくだ、いいざまさ」
彼は寒い街をあてもなく歩いた。

新吉原の遊女の、嬌めかしくあまい、胸のどきどきするような囁やき、柔らかく凭れかかった肩、情をこめた抓りかた。それがすべてみせかけであり、ごまかしであり、そのうえ些かも恥ずるけしきなしに、堂々と、自からその正体をあらわした。

岡場所でも同様であった。金を奪取するまでは好意的である。哀願的でさえある。殴りつけたり突き倒したりするのは、彼女たちの礼儀らしいが、ともかくいちおう嬉しいような気持にさせる。だがひとたび金の授受が済むが否や、たちまち

仮面をぬぎ、酷薄無情の正体をあらわす。女はもちろん、いまこころづけを貰った男や婆さんまでが、くるりと鬼のように変貌するのであった。

「要するにふんだくりゃあいなんだ、人情なんてものは弱い人間の泣き言だ、この世にそんなものはありゃあしねえんだ」
なんとというか知らないが長い橋を渡った。

橋の袂に番小屋があり、そこで「橋銭」なるものを取られた。その小銭を出しているときに雨が降り出した。

「悪くすると雪になりますね」

番小屋の爺さんが云った。昌平はつまらない皮肉でそれに酬いた。

「道の銭は取らないのか」

橋を渡ってから、まったく無目的に歩き続けた。雨がやまないで頭から手拭をかぶったが、両刀を差した侍にしては、稀有な恰好だろう。ゆき違う者がふしぎそうに見たり、慌てて除けて通ったりした。

「はてな、あの仏壇は、どこだったろう」

小さな社があったので、昌平はそこへはいつてゆき、道から見えない裏へまわって、木の朽ちたような高廊下へあがった。そこなら雨は除けられる、彼は刀をとって腰をおろして、大きな溜息をついた。

「そうだ、麴町の家の仏壇だ」

昌平は苦痛を感じたように眉をしかめた。

彼は初めあによめに向って、持参金を出せと云った。そんなつもりはなかったのだが、日頃からそれが頭にひっかかっていたのだろう。持参金付きの嫁を貰う兄も兄だが、それを

鼻にかけて、平べったい狐のくせをして、え、そんな顔をするあによめもあによめである。

「しかも金を隠していたじゃないか」

小銭の財布を出そうとして、刀を突きつけられて、仏壇のうしろから金を出した。それが持参金の内であるかどうかわからない、いわゆる臍繰りというものかもしれないが、ともかくごまかした金には違いはないだろう。いくら兄が吝嗇でも、侍であつてみればあんな場所へ金を隠す筈はない。

「夫婦の仲でごまかしあい」

昌平はごろつと横になった。寒いし、空腹はますます募るが、それ以上に疲れて、ひどく眠かつた。

「こっちはその金を六つ取つて、一つ返すような馬鹿ときている」横になつて彼は自嘲するよう呟やいた、「どういふつもりであんなことをしたか、やっぱり古草鞋のいじけた根性のためだろうが、……つまるところ騙されたり馬鹿にされたりするようにできてるんだ、しよせん葱を背負つた鴨じゃねえか、ざまあみやがれ」

彼はいつか眠つた。どのくらい眠つたものか、強烈な寒さで眼がさめると、続けさまにくしやみが出た。

そうしていてもしようがない、彼は社を出てまた歩きだした。骨のふしぶしが痛い、しきりにくしやみが出た。水洩が出た。頭がびんびんし、足に力がなかった。空腹はなおつたが、酔がさめたとみえて酒が欲しい。軀がばかに震え、がちがちと歯が鳴つた。

「いいきびだ、ざまあみやがれ」

そのほかにもう言葉はなかつた。

——朝までお寝かし申しせんよ。

——そんなとけえのたばるでねえ。

——こむらがえりがしんす。

——このひょうたくれア。

絶えずそんな幻聴が聞えた。

——ひと晩に百何両、うろんなのはこつちだ。

——金を出しな、金、金、勘定、勘定。

——番所へいつて話しをつけやしよう。

これらの幻聴の伴奏のように、濡れて重くなった草履の、ぴしゃぴしゃという音が聞えた。気のめいるような、うらさびれたさむざむしい音が。

六

日は昏れかかり、雨は降り続いていた。

稼ぎ帰りの合羽や蓑を着た人がゆき交い、濡れた犬が尾を垂れて通つたりした。軒の低い、ちぢかんだような家並、いかにも貧しく、佗しげな街であつた。しかし勝手口ではどの家でも、ことごとく庖丁の音が聞え、物を煮たり焼いたりする匂いが、まるで幸福をひけらかすように漂よつて来た。

昌平は雨の中をただ茫然と歩いてた。

魚を焼き、汁を煮る匂い。気ぜわしい庖丁の音。それは生活の跽音であつた。休む暇もなく動いている生活。……昌平は絶望的な悲しさで胸がいっぱいになった。働らきづめに働らいて、喰べて寝て、また働らく生活も悲しい。そういう生活からはみ出して、今宵一夜を頼むあてもなく、途方にくれ

ている自分も悲しかった。

「——いっそ辻斬りでもやっつけるか」

雨は肌着までとおっていた。

「——世間が世間ならこっちもこっちだ、どうせ墮ちるなら……」

暗くなった黄昏の街のひとところ、つい右側に「仲屋」と軒行燈を出した縄のれんがあった。昌平はふてたように、その店の中へはいり、長い台板に向って腰を掛けた。

——いざとなればあ刀を売ればいい。

辻斬りをやっつけようなどと、いま呟やいたばかりで、早くも刀を売るといふのは矛盾である。むろん自分では気がつかない、腰掛けると十二、三の女の子が来たので、

「酒を呉れ」

些さかならず氣負っていた。

ちようと時刻なのだろう、店は殆んどいっぱい客だった。彼には判別はできないが、日稼ぎの人足、土方、職人などという者だろう、若い人や中年者や、びっくりするような老人もいたし、なかには女（子供を伴って稼ぐらしい）もいた。食物の湯気と匂いと人いきれで、八間の燈がついているのに、店の中はごちゃごちゃとよく見通しがきかない。

「お待ちとおさま」

さっきの少女がすぐに注文の品を持って来た。寒さで震えていた昌平は、われ知らず喉が鳴ったが、爛徳利のほかに、なにか肴を盛った小皿を二つ並べられたので、「またか」と思った。これまでの遍歴中、ゆく先ぎきでこの手をくった。命じもしない物を勝手に並べて、べらぼうな金を強奪するのだ。

——もうそうはいかないぞ。

昌平は小女を呼び止めた。

「私はこんな物は注文しない、この店では客に押売りをするのか」

小女はげんそうな顔をした。

「それはつきだしです」

「私は注文しないと云ってるんだ」

「でもつきだしですから」

「なんであろうと」昌平の声は高くなった、「——注文しない物は私は金を払わないぞ」

すぐ右側にいた三十ばかりの男が、問答の意味を察したのだろう、好意のある笑い顔をこっちへ向けて云った。

「いいんですよお侍さん、そいつは店のおあいそでね、酒に付いてるんで、代は取らねえもんなんですから」

「代を取らない、では只というのか」

「もう一本召上るともう一と皿付きますが、ほかの店と違って此処は酒も吟味するし、喰べ物も安いんで繁昌するわけす」

「このどかばも千い坊になってからたれがぐつとよくなったぜ」向う側にいる男がむっとしたような顔で云った、「——もう少しすると出て来ますがね、お侍さん、このうちの娘なんだが、孝行者で纏緻よしで、これだけ繁昌するののひとつはその娘のはたらきですよ」

昌平は安心し、また感動した。幾らの物でもないかもしれないが、ともかく酒の肴を只で提供する、代金を取らないというのは嬉しかった。

「おやおや、旦那はさず濡れじゃありませんか」

右側の男が吃驚したように云った。

「そいつあいけねえ、そのまんまじゃ風邪をひいちめえませ、おうねえやねえや」男は小女を呼んだ、「ちよいと来て呉れ、こちらの旦那がすっかり濡れてるんだ、奥へお伴れ申して千い坊にな、ちよいと早いとこ乾かしてあげるように」

「いや有難いが、それは、なにしろ下までだから」

「そんならなおさらでさあ、向うにやあ火が幾らでも有るからすぐ乾きますよ」

それがいい。そうなさいまし。というふうに入々の声が集まった。それで辞退するのに困ってやむなく昌平は立つていった。

彼はすっかり戸惑いをしてしまった。いま聞いた「千い坊」というのだろう、色の白い十八くらいの娘が調理場からあがつて来て、いきなり「まあどうなすったんです、こんなに濡れて」と怒ったように云い、父親の物だろう、袴を二枚重ねたのと、帯、羽折、足袋まで出して、まるで弟をでも扱うように、側からせきたてて着替えさせた。

「済むも済まないありませんよ」彼女は小言を云い続けた、「——こんなくしょ濡れの物を着て、軀でも悪くしたらどうなさるの、ほんとに男の人ったら幾つになっても眼が放せないんだから、いいえそんな物はようござんすよ、早くあっちへいらつしやい、熱いのをあがってるうちに乾かしますから」うしろから袴を直し、羽折や着物の裾をとんとんと引いて、店のほうへと押し出すようにした。昌平はなんとも云いようのない気持になった、はつきり云えるのは鼻の奥がつうんと

なったことで、心持としては嬉しいとも悲しいとも、せつないとも判断がつかなかった。

「やあこれは、立派な若旦那ができましたな」

さっきの男が笑いながら迎えた。

「やっぱりそうですね、あつし共がお侍の真似をすると猿芝居だが、お侍の町人袴^{まちど}らえてえのは品がようござんすな、まあ一つ、こんな人間の酒で失礼だが、旦那のはいま爛直しをしていますから」

「そんならこつちのがいいぜ」向うの男が徳利を差出した、

「——これあいま来たばかりで、おらあ煮爛てえくちだから、これを先にあげて呉んねえ」

「それあい、じゃあ旦那これを一つ」

右側の男がそれを取次いで呉れた。

七

「ふざけたことうぬかすな、やいさんびん、表てへ出ろ」

こうどなる声を聞くまで、昌平は泣きたいような気持で飲み、ひたすら哀しく酔^{かな}っていた。彼はただ嬉しかった、全身に温たかい、豊かな、愉しいものが溢れるような気持だった。いつてみれば長い旅路のあとで、ついに目的地へ到着したような、甘やかな疲れと安息の思いに包まれていた。

——ざまあみろ、有るじゃないか。

彼はこう叫びたかった。

——こんな温たかい世間が、こんなに善い人たちが、ちゃんと此処にあるじゃないか、ざまあみろ。

彼は三人の兄やあによめに、そう云ってやりたかった。麴町の屋敷でんたい、否、侍というもののぜんぶに。そして新吉原から始まった、あの狡猾で卑しい女や男たちに向って。かれらは昌平を軽侮し、騙し、裸に剥き、そして罵り辱めた。

——本田の家には類のない能無し。

——うろうろするな、すっこんどれ。

兄たちの声がなまなましく聞える。そして家人の眼を忍んで、艶冶な書物を筆写する自分の姿。二十六という年になるまでの、澀んだ饅頭のような日々。……今こそ彼は、その過去に向って舌をだしてやりたかった。

——ざまあみやがれ。

昌平の頭は空転した。彼はこの「仲屋」へ迷子犬のように入って来た。兄たちの順送りのお下りを着て、鞆の剥げた刀を差し、頭からずつくり濡れ、古草履をびしゃびしゃさせて。……おまけにつきだしに文句を云ったりした。公平に客観すれば、しょせん鼻っ摘みの、しかもまったく無縁な人間にすぎない。それをかれらはこんなにも舐わって呉れた。こんなにも無条件で心配し、厚意を寄せて呉れた。

——これをあいつらに見せてやりたい、世の中にはこういう処もあるんだということを、まだこんなに善い人たちもいるということを。

昌平は酔った。いろいろと自分の感動も語ったらしい、右側にいた男と、向う側にいた男とは、かなり長いこと一緒に飲んだり話したりした記憶がある。右側の男はこの店の上客らしいようです、「あっしは佐兵衛てえ者です」と名を云った

りした。向うの男は絶えずむっとしたような顔つきだったが、これは顔だけのことで、格別に気むずかしいというのでもなく、自分はつまらない銚子職で不動様の裏に住んでいる、徳治と聞けばすぐわかる。などとまじめに名乗ったのを覚えて

いる。
だがどのくらい経ってからか、ひよいと見ると、二人の席には違う客がいた。次いで他の客と入れ替り、それがまたべつの顔に変わった。

——佐兵衛と徳治がいなくなった。

彼は非常な孤独と寂しさにおそわれた。二人に戻って貰いたかった、二人にいて貰わなければ、なにかとんでもない事が起りそうな気がした。それで昌平は頼んだ。

——あの二人を呼んで来て呉れ。

自分ではそのつもりであるが、実際はそうではなかった。彼の酔は程度を越し、そのために頭はまた空転し始めていた。

——ざまあみろ、この卑しい虫けら共。

彼はそう喚きだしたのである。(もつと多くの殆ど罵詈雑言)それが誰に対する叫びだったかは云うまでもない。しかしそこにいる人たちは事情を知らなかった。もつと悪いことには晩飯ときは疾うに終り、客は殆ど飲む一方の常連になっていた。

「ふざけたことうぬかすな、やいさんぴん、喧嘩なら相手になつてやる、表へ出ろ」

「さんぴんとはなんだ」昌平はどなり返した、「——きさまたちはまだ人を馬鹿にするか、まだ馬鹿にし足りないのか」彼は立った。相手はすぐ眼の前にいた、まだ若い半纏着の

男で、頭の上にちゃんと（人を嘲弄する）ような恰好で）向う鉢巻をし、紅鮭色の顔色で、こつちをまともに睨んでいた。昌平にはそれが新吉原のあの男のようにみえた、あの悪辣な婆さんのうしろに控えていた強そうな男に、……昌平はかつと逆上した。

「おれはもうがまんがならないぞ、刀を返せ、こいつを斬つてしまふ」

「笑あせるな、出ろつたら出ろ」

若い男は右手で爛徳利を掴み、立ちあがつて台板越しに殴りかかった。

白い短かい棒のような物が、顔の上へまっすぐに落ちて来た。「やめて」と女の悲鳴が聞え、顔の上でがしゃんとなにかが毀れた。大勢の顔と眼がこつちを見ていた。昌平は刀を取ろうとした。それはいつも座の右に置いてある筈だった。

——みんなぶつた斬つてやる。

彼は右側へ手を伸ばした。が、刀は無くって、空を掴んで、彼はその姿勢のまま横倒しになった。

「ふざけた野郎だ、外へ放り出せ」

「待つて、その人思い違いよ」

「吉公、くせになるぞ、の、しちまえ」

「待つて頂戴、乱暴しないで」

男たちの呪号や女の叫びが聞えた。昌平は腰掛と台板の狭い処でもがいた、起きられなかった。誰かが足を掴み、非常な力でずるずると引き出された。

——おれは捉まった、兄だ。

昌平は暴れた。吝嗇な長兄の恐ろしく怒った顔がみえ、あ

によめの無情な、平べったいせせら笑いの顔がみえた。彼女は片手に金の包を八つ持つて、片手でこつちを指さし、そしてかなきり声で喚きたてた。

「この男がやったんだよ、この男が、刀を取上げちまいな、そいつは泥棒なんだ」

昌平は暴れた。すると誰かが頭を殴った。軀がぐるぐる廻転し、地面が斜に揺れた。どこかへ落ち、殴られ、首を絞められた。

——みな殺した、みんな斬つてやる。

彼は刀を取りたかった。しかし伸ばした手は濡れた冷たい泥を掴んだ。また首を絞められ、はね起きようとすると思われた。

「お母さま」昌平は思わず叫んだ、「——堪忍して下さい、もうしません」

八

昌平がわれに返ったのは朝のことである。だが彼は医者から口をきくことを禁じられ、まる三日のあいだ、黙って寝ていなければならなかった。

彼はひどい病氣なのであった。

あとでわかったのだが、あのばかげた遍歴と雨に濡れたのが原因らしい。高熱が続いて、始めは嘔きけにも悩まされた。けれども意識は割とすれば明瞭であった、自分が「仲屋」の奥に寝かされていることも、人の出入りもよくわかった。

佐兵衛という男や、鋤職の徳治や、それから喧嘩相手の

若者と、その親方というのが伴れ立って、謝罪に來た。親方は左官屋で小助、相手の若者は「吉公」というそうで、二十か二くらいに向うつ氣の強そうな、そのくせはにかみやらしい、なかなか男ぶりであった。

「この野郎がとんでもねえ御無礼を致したそうで、どうかまあ、そこところをひとつ」

小助親方は幾たびも頭を下げた。吉公も口のなかでぶつぶつ詫を云って、親方より一つくらい余計におじぎをした。鏝職の徳治が二度めに、來たとき、むっとした口ぶりで、

「あつし共がいればよかつたんだが」と濟まなそうに云った、
「――旦那の話しを聞いてねえし、なにしろ氣の早え野郎で、まあ勘弁してやつてお呉んなさい」

かれらは一と言も昌平を責めなかつた。すべて自分たちが悪いといつて謝まつた。

昌平は黙つてべそをかいていた。

謝まりたいのはこつちであつた。みんな己れの責任である、相手のみさかいもなくなるほど泥酔して、勝手なことを喚きちらしたり乱暴をやつたりした。

――もしこれが麴町の屋敷だつたとしたら。

こう想像すると膚がちり毛立つた。

仲屋の父娘の親切には、彼としてはもう言葉がなかつた。

父親の弥平は五十四、五だろ、瘦せた背の低い軀で、一日じゅう調理場で黙つてなにかしながら、

「おい千代、薬をあげるんじゃねえのか」

などと声をかける、絶えず昌平のことが氣になるふうであつた。

娘の千代は十八だという。一人娘で、母親に去年死なれたあと、父の身のまわりの世話から店の事まで（佐兵衛たちに云わせると）母親以上に手際よくきりまわしているそうであつた。……彼女は始めの二日は殆ど附きつきりで看護して呉れた。熱が高いので絶えず冷やさなければならぬし、嘔く物の始末や薬の世話など、夜中でも自分でてきぱきやつて呉れた。

「あの晩の騒ぎで町廻りが來たんですよ」五日めの朝、千代はそう云つた、「――お父つつあんが出て、親方のこと親類の者だつていったんですけれど悪かつたでしようか」

「悪いなんて、そんな、……有難いよ」

「お父つつあんとでも心配してるんです。貴方の話を伺つて」千代は薬を煎じていたが、俯向いた眼がうるみ、声が柔かくしめつていた。

「たとえ話し半分としても、とてもそんなお屋敷へはお氣の毒で帰せないって、……佐兵衛さんや徳さんもそう云つてましたわ」

「――私にはまだ信じられない、どうしてみんなこんなに親切にして呉れるのか」

昌平は眼をつむつて静かに云つた。

「――眼がさめると、なにもかも夢になつてしまふんじゃないか、そんな氣がするくらいです、本当にそんな氣がするんです」

「夢じゃないわ、もしか夢だつたとしても、貴方がその氣になれば」千代はちよつと躊躇つた、

「――そしてもしもお氣に召すなら、いつまでもさめずにい

られるわ」

「そんなことが、まさかそこまで迷惑をかけるなんて」

「だって佐兵衛さんはそのつもりでいるんですよ」千代はいきこんで云った、「——貴方が此処で一生暮らすって仰しかったのを本気にして、もう住む家の心配までしていますわ」

昌平はまた鼻の奥のほうがつんとなった。それから自分に舌打ちをして呟やいた。

「なんというだらしない、……私は、いったいどんなことを話したんだろう」

「お屋敷のこと、お兄さまたちのこと、二十六年のお暮しぶりや、お金のことや、それからほうぼう遊びまわって、ひどいめにおあいになったこと、……でも、そんなこまかい話により、喧嘩のとき貴方が仰しかった一と言、あの一と言でみんなあつと思っただんです」

千代は顔をそむけた。そして指の先で眼がしらを撫でながら、続けた。

「馬乗りになっていた吉さんも、駈けつけて来た佐兵衛さんもあの一と言で息が止ったような顔をしました。……お母さま、堪忍して下さい、もうしませんって……」

抑えきれなくなったらしい、千代は泣きだした。自分も母に死なれて、そこはいっそう共鳴したわけかしれないが、両手で顔を掩って、泣きながら、とぎれとぎれに云った。

「あたし一生忘れませんわ、あの声、お母さま堪忍して下さい、もうしません、……貴方の話しがぜんぶ嘘でないってこと、あたし初めてわかりました、……貴方は、いじめられっ子だったんだって」

昌平のつむった眼尻からも、涙がふつと溢れだして、小窓のあかりを映しながら、頬を伝って枕紙へ落ちた。くくと嘔びあげる千代の声に和して、煎薬の煮える音が呟やきのように聞えた。

深川仲門前に「仲屋」というたいそう繁昌する居酒屋があった。安永年代の好事家の記録にも載っているが、千代という娘に武家出の養子を取って、ひと頃は「侍酒屋」などともいわれたらしい。土鯔を丸のまま串焼きにし、味噌たれを付けて「どかば」という、つまり土鯔蒲焼の意味だろうが、それを一年中つきだしに使うのが、特徴でもあり評判だったようである。

ずいぶん繁昌して、相当以上に金も出来たらしいが、仲屋はいつまでも居酒屋をやっていた。店を拡張するとか、料理茶屋でも始めたかどうかという客もあつたが、その武家出の養子はまるで相手にしなかった。

「そいつはまあ、生れ更って来てからのことにしましょう、生きているうちは、この土地を一寸も動くのはいやですわね」すると側から女房が、横眼に色っぽく亭主を見て、それ以上色っぽく微笑しながら、客にはわからない助言をするのだそうである。

「そうね、夢がさめないって限りもないんですものね、……はいお待ちとおさま、あかだしお二人さんあがり」